本と地域の情報誌

県北 どらくろあ

第65号　2021年8月1日（毎月1日発行）

岡田美知代覚書③

# 「田山花袋の『蒲団』のモデル、そして文豪たちとの交遊」

原博己

一九五九年から六一年にかけて、花袋研究家で東京学芸大学教授の岩永胖先生が度々美知代おばさんを訪ねて来られた。美知代おばさんは田山花袋の小説「蒲団」のモデルだったのである。

夕食に季節の野菜をふんだんに使った母仕込みの味噌汁を作った。岩永先生曰く、「こりゃあ味噌煮だな」。いつも、おかずの数は少なかったが、楽しい夕食だった。冬寒い季節には名古屋コーチン一羽を下拵えして水炊きにして幾日も食べたこともあった。

話を元に戻すが、美知代おばさん訪問の目的は、英語を習うことだった。私は、NHKの朝のラジオ番組「基礎英語」をテキストで独習していたが、ラジオで聞く英語と美知代おばさんに教わる英語は落差が大きかった。

美知代おばさんの英語はアクセントが重厚で、テキストも印刷物を切り抜いてノートに貼られたものだった。紙質も悪く、印刷も分かりにくかった。この使い古された美知代おばさんの独自テキストは、戦後の物不足だった時代に、美知代おばさんから英語を学んだ多くの先輩がいたことを物語っているようだった。美知代おばさんには使い慣れたテキストだったようだが、初心者の私には難しすぎた。

学習が終わると、明治、大正の文人、文壇の話を熱っぽく話してくれた。美知代おばさんの話術には底しれぬ魅力があった。同じことを聞いても、初めて聞くようなときめきがあった。

国木田独歩、若山牧水、島崎藤村、田山花袋、森鴎外、神近市子、政宗白鳥、安成貞夫、二郎兄弟、野上弥生、北村透谷、荒畑寒村など話題は無限に広がった。俳人、高浜虚子を語ることもあったが、虚子先生の写生文をしきりに褒め、なぜか俳句に触れることは一度もなかった。虚子主宰の「ホトトギス」に野上弥生の作品と前後して、美知代の短編小説「一銭銅貨」が掲載されていたことを知ったのは、かなり後のことであった。

美知代おばさんが語る文人、文壇のエピソードには、時、場所、背景などの特定ができないのが残念である。例えば、「吉川英治が、障子貼りしてくれたことがあるのよ」、こともなげに美知代おばさんは、この前のことのように話してくれた。あの天下の吉川先生が？私は思わず聞き返した。しかし、無名時代であれば不自然なことではない。私のほうが異常反応していたのだと思い返した。

美知代の夫、永代静雄が毎夕新聞社の編集局長を退社したのが大正八年十一月、吉川英治が同社に入ったのが大正十一年、ということは永代静雄の影響力が及んでいたというのであろうか。

田山花袋（ウィキペディアより転載）

「蒲団・重右衛門の最後」（新潮文庫）

# 牧水は夫の早稲田の同窓
# 好んでエピソードを語った。

美知代おばさんが好んで語る文人のエピソードは、若山牧水だった。牧水は、美知代おばさんの夫だった永代静雄と早稲田大学の同窓で飲み友達だった。私は、牧水の全集を買って永代静雄、美知代夫妻の接点を調べたことがあった。牧水の短歌の中にそれを見出すことはできなかったが、唯一牧水の小文「貧乏首尾無し」（第十一巻）に見ることができた。それには次のような行りがあった。

「早稲田を出たのは、確か二十四歳の時であった。学校を出るとある新聞社に勤めた。―そうだ、靴をば永代静雄君のを借りて穿いたのだった。」

ただ、それだけの事なのだが、お互い貧乏時代だったとはいえ、他人の靴を穿くなどということは、よほど親しく、気の置けない、信頼し合える間柄でなくてはできぬことである。しかも、新聞社に就職して初出勤という門出の日にである。

若山牧水
（ウィキペディアより転載）

牧水と永代静雄は早稲田の飲み友達だったという。牧水、美知代も同じ明治十八年生まれである。明治三十六年には、雑誌「中学世界」に美知代は、小説「小使」を発表し、牧水は俳句、短歌を発表している。その頃、美知代と牧水に特別な接点があったとは考えられないのである。美知代と牧水の友情は、夫の静雄を介してのものと考えるのが自然と思われる。

場所は聞いていないので特定できないが、美知代おばさんは牧水とつくしんぼを採った話をしてくれたことがある。これだけでも、美知代と牧水の微笑ましい交誼の一端がうかがえるのではないだろうか。その頃、何らかの特別な出会いがあったとすれば、話さずにはいられなかったと思うのだ。

また、美知代おばさんが話してくれたエピソードで、牧水が川舟で川下りの旅をしているときの話を何度もしてくれた。牧水は、舟の中でみかんを二つに割って、皮を裏返し、それを盃と為し、持参の瓢箪の酒を見知らぬ旅人と酌み交わしたという話など、牧水の人柄が伺えて、時代を超えた温かさを感じたものである。

美知代おばさんが語る文人のエピソードは、無限と言っていいほどだった。その都度、新鮮な思いで聞くことができたのだが、記憶に鮮明に残るものは、ごく限られた特定の文人だったように思う。広津和郎のことは「わろ」と言って話してくれたが、どのような話だったか思い出せない。晩年に至って、差出人・広津和郎、宛先・花田美知代と書かれた小包の包装紙を見かけたことがあるから、美知代おばさんから便りを書かれたことが推測される。でなければ、美知代おばさんの再婚後の姓・花田で小包は届かなかったと思われるからである。

晩年の美知代おばさんが好んで読んでいた唯一の全集が、吉川英治の「新平家物語」だった。そのほか、山崎豊子の「ぼんち」、今東光の「弓削道鏡」等も読まれていた。「小説新潮」の今東光の連載小説「河内風土記」を、「この生臭坊主め」と笑いながら読まれていたのを覚えている。

時には美知代おばさんの小説を読み聞かされることがあった。大抵が三十枚前後の短編小説だった。昭和の時代を書くことは少なかった。大正期に書かれた焼き直しがほとんどだった。感情をこめて、一字一語確かめるように読み聞かせてくれた。特に印象に残っているのは、「独歩とお信さん」の短編小説だった。よほど思い入れがあったのだろう、中村黒光の「黙移」を取り寄せて参考資料にされていた。

取り寄せに際しては、「黙移」のほか花袋の「蒲団」「妻」「生」「幼きもの」など文庫本も含めて、花袋研究家の東京学芸大学教授・岩永胖先生にお願いされていたようだった。

「独歩とお信さん」の原稿は、「婦人公論」へ投稿された。原稿は採用されなかった。当時の編集長、三枝小枝子の丁寧な手紙が添えられて、美知代おばさんのもとに返却された。以後、美知代おばさんが小説を書く姿を見ることはなかった。

英語のスペルの練習は欠かさず続けられていた。書き損じとは思えない原稿用紙、数日分の新聞など、英語のスペルの練習帳代わりに常に身近に手の届くところに置かれていた。万年筆は、生涯使われたと思える太字用のよく使い込まれた外国製のものだった。

襖で仕切られた隣部屋は押し入れと床の間、床の間には、名前は思い出せないが著名な日本画家の描かれた菊の絵の掛け軸がかかっていた。記憶にあるのは、掛け軸に子息の太刀雄さんが鉛筆で書いた落書きが残っていたからだ。美知代おばさんは懐かしそうに落書きのエピソードを話してくれた。そういうときの美知代おばさんは、涙ぐむこともあった。

（次号へつづく）

# 吉本ばなな・『キッチン』
## ――アンニュイ風な女性の出現

何とも不思議なところに迷い込んだ感じです。不愉快というのではなく、かといって陶然としているわけでもありません。これまでとは異質な小説世界に当惑しているのです。

吉本ばなな『キッチン』（88年刊、福武書店）の事です。24歳の若い娘に「（冬の夜の台所で）私と台所が残る。自分しかいないと思っているよりは、ほんの少しましな思想だと思う」「人生は本当にいっぺん絶望しないと、そこで本当に捨てられないのは自分のどこなのかわかんないと、本当に楽しいことが何かわかんないうちに大っきくなっちゃうと思うの」と、訳知りの名言を押しつけられて当惑していると言った方が、正直なところです。

小説は、「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う」と、始まります。この娘「桜井みかげ」は、両親が若死にし、中学に上がる頃に祖父がなくなり、その後にずっと2人でやってきた祖母がなくなったのです。天涯孤独となり、放心して、途方に暮れているところに、「田辺雄一」なる祖母の知り合いの青年がやって来ます。「しばらく家に来ませんか」と持ちかけるのです。

派手で美しい母親は、元は父親だったのです。妻に死なれ、「もう誰も好きになりそうにないから」と手術して「そのすじの店」を持ち、雄一を育てたという。田辺家は、静かで居心地がよく、1ヶ月と長くなるのです。

その夜のうちに押しかけた田辺家の台所は、シルバーストーンのフライパンと、ドイツ製の皮むきがあるのです。「ちょっと見ると全くバラバラでも、妙に品のいいものばかり」なのです。この台所を気に入ります。

雄一は、母親と2人暮らし。その生活感がないこんな「みかげ」に対し、私は「アンニュイ（物憂さ）」といったはやりの言葉をあてがってみました。脱力感は、彼女にあてはまりそうです。ですが、「みかげ」がみせる祖母と一緒に暮らした家と、祖母への思慕は、妙に湿っぽいのです。「夜遅くにかける電話の向こうの祖母の声、寒い朝のふとん、ろう下にひびく祖母のスリッパの音、カーテンの色……」などと思い出し、ちょっと古風です。

家の片付けに通ったり、昔のカレと出会ったりといろいろあります。「何にせよ、言葉にしようとすると消えてしまう淡い感動を私は胸にしまう」といった独白が気がかりです。

最後は、「もっともっと大きくなり、いろんなことがあって、何度も底まで沈み込む。何度も苦しみ何度でもカムバックする。負けはしない。力は抜かない」と終わるのです。何とも強い、前向きな言葉です。

ひ弱そうだった娘に何があったのだろうかと、思わず読んだページをめくり直しました。ああ、これは、繊細な感受性の娘の成長物語なのか――と、はじめて気がつきました。

この単行本は、なんと70ページ。散文詩のような、短い小説なのだとも理解しました。

80年代、おりからの政治的なアパシー（無関心）のサブカルチャーに育てられて、伝統を飛び越えた若い世代が続々と生まれてきたのです。

次回は、小川洋子『妊娠カレンダー』を取り上げます。

---

## また読んでみたい本㊸
### ――――――青年たちに

音谷 健郎

【福武書店版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月１冊ずつ紹介しています。

第63回は、吉本ばななの歌集『キッチン』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧･庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

# 虫と草木と人びとと㊸　中村慎吾

# 「草花の博物誌」

著者紹介：一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

## セイヨウタンポポ　夏、秋にも咲く外来種

タンポポの花茎（花を支えている茎）で草笛を作ったことがありますか。太さや長さのちがいで音色のちがう草笛ができ、楽しいものです。しばらく吹いていると、口にくわえていた方の茎は外側へめくれてきます。そうなったら音が出なくなるから、こんどは口にくわえていた方も、また、反対側の四つに割って、どちらもしっかりそらしてプロペラのようにしましょう。それから細いササの茎をとおしてプロペラを強く吹いてみましょう。うまくまわったら次は流れている水につけてみましょう。これでタンポポの水車のでき上がり。ぼくがこどもの頃、もう六十年も前のことですが、友だちと春になると、タンポポの花茎で草笛を作ったり、水車を作ったりして遊んでいたものです。

ぼくが子どもの頃、草笛などにしていたタンポポはすっかり姿を消してしまいました。「うそ！そんなことはないよ。タンポポはどこだって生えているし、春だけでなく、夏でも秋でも花が咲いているよ」

と、きっと、みなさんはこういうでしょうね。そのとおりです。ぼくが子どもの頃、草笛にしていたのはカンサイタンポポ、みなさんが今、見ているにはセイヨウタンポポ、つまり、タンポポといっても種類がちがっているのです。

セイヨウタンポポは名前のようにヨーロッパから日本へ入ってきたタンポポです。今から九六年前、北海道へ入ってきたそうですが、庄原あたりでは三十年前頃から広がり始め、今ではカンサイタンポポをおしのけて、どんな荒地でも花をつけ、たくましく生きています。

そして、カンサイタンポポは春だけ咲くのにセイヨウタンポポは夏でも秋でも花を咲かせますから、どんどん広がり、今では吾妻山でも見られるようになりました。

セイヨウタンポポとカンサイタンポポとは総包片（そうほうへん）のようすでかんたんに見分けられます。総包片が全部上向きだったらカンサイタンポポ、花に近いところの総包片が下へたれていたらセイヨウタンポポです。春、タンポポが咲きだしたら草笛を吹きながら、タンポポ地図を作ってみたらどうでしょう。

## タンナトリカブト　狂言にも出てくる猛毒

附子（ぶす）という狂言があります。

これは外出する主人が召使の太郎冠者（かじゃ）と次郎冠者に壺を預け「この中に附子という毒が入っているから気をつけろ」といって出かけました。主人が出た後、太郎冠者

はこわいもの見たさからふたをとって見ると、うまそうなもののようです。おそるおそるなめてみると、それはめったに口にすることのできない黒砂糖でした。次郎冠者も来て二人はもう少し、もう少しとなめているうちに、とうとう全部食べてしまいました。しまったと思った二人は主人が大切にしている掛軸を破り、天目茶碗を割って主人の帰りを待つことにしました。

夕方、帰って来た主人を迎えた二人は「留守中　相撲（すもう）をとっているときにあやまって掛軸を破り、茶碗を割ったので死んでお詫びをと思い　附子を食べたが死に切れず　このざまです」といい、二人の冠者は退散して幕となるという狂言で、今でもよく上演される狂言のひとつです。

主人が附子といったのはトリカブトのことで、トリカブトの根には猛毒がふくまれていて、むかし、アイヌの人びとは根をすりつぶしてそれを矢の先にぬって毒矢を作り、クマ狩をしたということは有名です。また、毒と薬は紙一重、トリカブトの根は烏頭（うず）・附子という名前で神経痛などの痛み止めの薬としていたようですが、とても危険だったようで、今は使われていません。

日本にも多くの種類が分布していますが、中国地方・九州・韓国南部のものはタンナトリカブトと呼ばれています。タンナとは韓国の南に浮ぶ済州島（シェジュトウ）の古い呼び名「耽羅（タンナ）」によるものです。夏の終り、山でタンナトリカブトの花に出会ったら狂言「附子」に登場する太郎冠者らのみごとな頓智（とんち）を思い出してみましょう。

# 「つれづれ歌談」⑭

松岡 初枝

盛夏、波しぶきに千鳥が飛んで、赤い氷の字が大きく書かれた旗のひらめく店があちこちに見られる頃は、夏祭りも最盛期となります。やがて立秋、祭りの後はもの悲しい静けさだけが残ります。

・淡海（おうみ）の海夕波千鳥汝（な）が鳴けば情（こころ）もしのに古（いにしえ）思ほゆ

柿本人麻呂

近江朝を治めた天智帝、そして大津の宮を偲び、今は荒れ果てた様子を嘆いたと思われる歌です。人麻呂は云わばスター歌人で、宮廷歌人と呼ばれ、朝廷行事の儀礼の歌や、天皇そのものを礼賛する歌を多く詠みました。

・磯城島（しきしま）の大和の国は言霊の助くる国ぞま幸（さき）くありこそ

柿本人麻呂

磯城島の、は大和に掛かる枕詞です。国の意向で発つ遣外使節や地方へ赴任する人に、どうか無事で、わが大和は言霊の国だから…。悪口雑言よりも、美しい言葉こそが大切です。

・東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる

石川啄木

「一握の砂」冒頭の歌ですが、この歌碑が北海道にあります。短い夏の北の海、孤独で借金取りから逃れ歩いた啄木の心に、蟹の姿がしみじみと共感の対象だったのでしょう。

・ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく

石川啄木

ふるさとの岩手弁、上野駅は盆の帰省の人でごったがえしている。その中、岩手の訛が望郷の思いを少しでも満たしてくれたのでしょう。二十六歳で早逝した彼。切ないですね。

夏は活気と淋しさが同居していて、光が強ければ影も濃い。やがて秋です。

# 振り子時計

## ――現代御伽草子㊾

亜木冬彦（あきふゆひこ）

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「もう日本もおしまいだな」

久しぶりの煎茶を飲みながら、つい愚痴が出た。いつもは白湯（さゆ）か、良くてドクダミやハブソウなどを乾燥した薬湯なのだが、今夜は特別だ。夕食のスイトンにも白米が入っていた。

「外ではそんなことは言わないでくださいね」

妻の沙也がやんわりとたしなめた。

「だってそうだろう。三十半ばのおっさんなんか徴兵して、何になるんだ？　おれは近眼だから、鉄砲を撃ったって当たるわけがない。おれは時計屋なんだよ。時彦という名前だって、おやじが店を継がすためにつけたんだ。職人として、時計の修理だったら誰にも負けない自信がある。世間様のお役に立てるという自負がある。そんな人間をドンパチの場所に放り出すんだから、もう勝負は見えている」

沙也が心配そうに玄関の方を見た。誰かに聞かれたら、軍隊ではなく刑務所行きになる。

柱時計が鳴り始めた。いつもの習慣で、数を数えてしまう。ちゃんと八回鳴った。卓袱台の上に置いた懐中時計を見る。

「53秒、早いな」

今朝、ゼンマイを巻いたばかりなのだ。振り子の重りを調節すれば正確になるが、それだとゼンマイが切れてきたときに今度は遅れてしまう。一週間に一度、ゼンマイを巻くときに時刻が合うように調節している。

（あいつに似て、気まぐれなところがあるからな）

精工舎の「TRADE　MARK　ST」、オーバーホールはしてあるのだが、ゼンマイに問題があるのだろう。交換できればいいのだが、物資欠乏で部品を取り寄せることができないのだ。

幼馴染の三朗多の顔を思い浮かべた。同じ商店街の薬屋の三男坊で、東京の製薬会社に勤めているはずが、いつ帰郷したのか、大きな荷物を抱えて店に現れた。

「結婚おめでとう」

沙也と祝言を上げたのは、半年も前のことだった。

油紙の包装紙から出てきたのが、振り子式の掛け時計だった。かなり使い込まれている。

「釣り宿でね、動かなくなったやつを譲ってもらったんだ。潮風でギアが錆びてしまったんだろうな。時彦さんなら直すことができると思ってね」

故障した祝い品なんて縁起でもないと苦笑を浮かべたが、そういうことも含めて、三朗多らしいと思った。

「とても良い音色で鳴るんだよ。それが不思議と、朝と夕方では違った音色に聞こえるんだ。朝は楽しくて優しい音、夕方はしみじみと淋しい音、気分の問題なのかな。潮騒なんかも影響しているのかもしれないな」

何か思い入れのある時計なのだろう。

「こんな音を聞きながら時間を過ごせば、きっと穏やかに歳を重ねられるんだろうなと思ったんだ」

お茶を運んできた沙也が、感激したような顔で頷いている。

（相変わらず口のうまいやつだ）

子どもの頃から大の本好きで、おもしろい本を読むとその内容を講釈してくれるのだが、実際に自分で読んでみるとそうでもない。三朗多の話の方がはるかに魅力的なのだ。

結局、故障した時計を、極上のお祝い品にしてしまった。

「じゃあ、時計が直ったら聞きに来るといいさ」

そう声をかけると、淋しそうな笑みを浮かべた。

「無事、復員したら、そうさせてもらうよ」

召集令状が来ていたのだ。五年も前のことだった。そのときの約束は、未だ実現していない。

「一週間に一度、ネジを巻くのを忘れないようにしてほしい」

柱の時計を見て言った。

「わかりました」

沙也が、背筋を伸ばして返事をした。

「そのとき、ネジを巻きながら、心

の中でエールを送ってくれないか。おれは、軍隊ではきっと落第生だ。不器用で要領が悪いからな。人付き合いも苦手だ。くじけないように、がんばれ、がんばれ、と励ましてほしい」

「毎日、ネジを巻きます」

わたしは苦笑を浮かべた。

「いつも心が張り詰めているとくたびれてしまう。一週間に一度ぐらいがちょうどいい」

沙也が不満そうな顔をした。

「じゃあ、こうしよう。八時だ。夜の八時に時計が鳴りはじめたら、おれのことを想ってほしい。おれとの生活を思い出してほしい。おれの無事を祈ってほしい。おれも、君のことを想うよ」

懐中時計を握りしめた。精工舎の名機、エンパイヤだ。一秒の誤差もないように仕上げてある。

「もっともおれは、八時に限らず、ずっと君のことばかり考えていそうだがな」

沙也の瞳から涙が溢れだした。

「店の準備をしているのに悪いね。回覧板を持って来たんだ」

宮田さんが顔を出した。以前は八百屋をやっていたのだが、かなり前に店じまいして、今は夫婦二人で年金暮らしだ。商店街も櫛の歯が抜けるように店が減って、開店している方が少なくなってしまった。

「あれ？　もう八時を過ぎていると思ったがな」

宮田さんが、柱にかけてある古い時計を見て言った。

「あっ、遅れているんですよ。もう、かなりのお爺ちゃんですからね。暑さでへばっているのかもしれない。あとでネジを巻いておきます」

宮田さんが愉快そうに笑った。

「まるで、生きているみたいに言うんだね」

「ときどき、そう思うことがあります。わたしが古本屋をオープンしたときの開店祝いなんです。大叔父……、わたしの祖父の弟にあたる方なんですが、本好きだったみたいで、大量の古本と一緒にこの時計を贈ってくれましてね」

「ああ、伊豆の大島で釣り宿をやっているという三朗多さん……」

「一昨年、ちょうど百歳で亡くなりました」

変わり者の大叔父のことを覚えている人が、まだけっこういるのだろう。田舎町で流れる時間はゆったりしている。この古時計のように、停まっているときさえあるような気がする。

戦地から復員して来た大叔父は、この振り子時計を抱えて、伊豆の大島に出かけて行ったという。そして、そのまま釣り宿の入り婿におさまってしまい、戻って来なかった。祖父から聞いた話だ。

サイレンが響いた。宮田さんと顔を見合わせて、あわてて広島平和公園の方角を見定めて合掌、瞑目した。

「ボーン、ボーン、ボーン……」

心に沁み入るように、振り子時計の音が響いた。


まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
　無料の漫画ルームもあります。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30 ～ 18:30
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

＜広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円＞

# 今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

## 「花衣ぬぐやまつわる……」

田辺聖子 著　集英社文庫

タイトルに使われている「花衣ぬぐやまつわる紐いろいろ」、大正から昭和にかけて豊麗な句を遺した女流俳人、杉田久女の代表句である。花衣は花見の時の着物。久女は、松本清張の「菊枕」、吉屋信子の「底の抜けた柄杓」のモデルになった伝説の人物で、俳句界の巨人・高浜虚子を崇拝するあまり、ヒステリックな言動からホトトギスを除名され、最後は精神病院で狂死したことになっている。

作者は、久女の関係者の話や文献を丁寧に咀嚼することで、巷間の風評で貶められた久女の純粋な素顔を洗い出している。多くの俳人、俳句が紹介されているが、その背景を知ると魅力が倍増する。

## 「昨夜のカレー、明日のパン」

木皿泉 著　河出文庫

1952年生まれの和泉努と57年生まれの鹿年季子による夫婦脚本家のペンネームだ。これが初めての小説作品だという。9つの連作短編が収載されている。最初のタイトルが「ムムム」、なんだこれはと読み始めたら、ムムムの正体に納得。いずれも突飛な設定で驚かせてからの見事なエンディング、ほんわかと幸せな気分にさせてくれる。

若くして旦那を亡くしたテツコとギフ（義父）の家庭が舞台なのだが、人生のペーソスも登場人物の鷹揚なやさしさがくるみこんでくれる。テツコの恋人のキモい岩井さんも、かわいらしく思えてくる。悲しい……、されど人生は続くのです。

## 「異形の日本人」

上原善広 著　新潮新書

「異形の系譜――禁忌のターザン姉妹」「クリオネの記――筋萎縮症女性の性とわいせつ裁判」「花電車は走る――ストリッパー・ヨーコの半生」等々、目次には刺激的なタイトルが並んでいる。覗き見的な興味で読み始めたが、どうしてしっかりと人物の内部に踏み込んでいる。路地（部落）という出自をカミングアウトしている著者の"異形"への視線は、どこか暖かだ。

「溝口のやり――最後の無頼派アスリート」、ド根性で世界の強豪と渡り合った溝口和洋の言動は驚嘆&痛快、「皮田藤吉伝――初代桂春團治」、路地出身の春團治の破天荒&悲哀に共感、異人、いや偉人に墓など必要ないのです。

## どら書房 ≪貸本屋システム≫

・店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば３割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引

・書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

## ふるさとの開拓者⑥

# 「義勇軍」（広島県退職校長会、平成9年発行）

「満蒙開拓青少年義勇軍」、満州国の開拓民として青少年を送出した制度である。日本は昭和7年頃から関東軍を中心に満州への農業移民政策を展開したが、昭和12年に日中戦争が始まると移民の確保が困難になった。その補填のため、小学校を卒業した16歳から19歳の身体強健な男子が、父母の承諾を得ることを条件に応募できるようにした。

全国拓友協会の調べでは、満蒙開拓青少年義勇軍（以下、義勇軍と略称）として満州に渡った青少年は９２４８０人。広島県は長野県（６０７７人）についで多い４６６４人が参加している。そして、苛酷な条件下で多くの犠牲者を出した。

義勇軍は当人の希望による自由応募が原則だが、実際には当局から各都道府県へ、さらに各学校へ応募数が割り当てられ、それに応じて各高等小学校の担当教師が卒業生に応募するように働きかけたのが実態である。

「国策に応じて民族協和・大東亜建設・王道楽土を建設とするという国是にしたがって義勇軍の送出に尽力した教員・校長…そのことが今も尚教育者と教え子の関係に深いわだかまり、不信、怒りのあることが教育不信・教育者不信につながっていることを拭い去ることはできないし、教育者として胸が痛み、良心が許しません。」

義勇軍の募集ポスター

「義勇軍」発刊に尽くした当時の広島県退職校長会会長、丸子要一氏が巻頭に書いている。国のための行為が、結果的に教え子を煉獄の地へと送り出してしまったわけで、複雑な心境がうかがわれる。そして、加害者としての慙愧と後悔、この事実を埋もれさせてはならないという決意が、この本を誕生させたのだろう。

誌面は、義勇軍関係者の寄稿によって構成されている。「第一部　義勇軍志願への決意」は、応募者の当時の生の声だ。「一昨年の春義勇軍の活動写真を見、義勇軍の話を聞いて、すっかり感激した。よし満州に行って、一身を大君に捧げようと思った。」「其の時先生が一番先にすすめられたのは青少年義勇軍への参加である。（中略）勇ましいあの純真な青少年義勇軍となって満州に渡り、ほんとうに御國の為を思い、日露の役や満州事変などで戦没された人の霊と共に鍬を振ったらどんなに愉快だろうと夢見ている。」、純真な想いが溢れている。

「第六部　義勇軍送出に係わった教師から」には、本誌の「松花江比婆開拓団」でも紹介した西城開拓団の一員として、自らも満州に移民した白根淳良氏の寄稿が掲載されている。

「昭和十四、十五、十六年度と連続、私は高等科二年生の受持教師だった。勿論、本人、両親、担任と四者一致を自論としての義勇軍問題であった。当時の広島県庁、職安、校長と縦の系列は相当にきびしく、上位が下達されていたようである。（中略）昭和十七年四月、比婆、双三、高田、豊田、賀茂五郡で三一〇名が鵜殿中隊として入所していた。」

その後、昭和20年3月、白根氏の教え子を含む２９１名が東安省完達嶺義勇軍に入植合併。同8月9日ソ連軍侵入、完達嶺義勇軍は入植地を放棄して北方の宝清街に撤退するのだが、ソ連軍の攻撃を受けて壊滅。

「若き拓士八十四名はこの戦闘で、十七、八才を最後にあの廣野に散華、永遠に還らぬ人となったのである。可哀想であった。相すまないことであった。」

16歳の少年を、国家として半強制的に戦士として使役していた事実は重い。忘れてはならない史実である。

## どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

玉音を今も耳底に昭和の子　近藤 昌平

夏マスクとれば素顔の無精ひげ　冨久 光

コロナ禍に終日（ひねもす）蟄居半夏雨　片岡 正人

夕ぐれや水田の蛙声を増す　西谷 白及

ひぐらしの鳴く里に来てひとりぼち　隆愚

藍浴衣襷掛して厨事　大槇 三代子

草刈りや軍艦マーチの六十路　赤川 冬人

エンジンの音軽やかに帰り来ぬ　松岡 初枝

夫（つま）も現役古希を迎へて

## 投稿＆寄稿

### 候のことば
### 「灯籠流し」

隆愚

八月十五日は月遅れ盆、そして終戦記念日でもあります。先祖の霊を送る灯火を川に流す灯籠流しには、戦火に散った人々への祈りも込められます。広島では原爆の日、八月六日のとうろう流し。長崎では古くから、初盆の霊を船に乗せて見送る精霊流しの習慣があります。夜の川面にいくつも静かに流れていく灯籠には、そのひとつひとつに祈りや思いがこめられています。

おもざしのほのかに燈籠流しけり　飯田蛇笏（だこつ）

### 「保護猫」

赤川仁洋

子猫を拾ってしまった。片手の掌にのるほどの小さな子猫で、目ヤニだらけ。動物病院に連れて行ったが、ドクターは帰ってしまったあとで、子猫用の粉ミルクを購入した。自宅に帰って、説明書通りに作って飲ましたが、半分ほど残している。試しにドラマのために買ったゼリー食を与えたら、「ウマウマウマ……」と絶叫しながら猛然と食べ始めた。乳離れしていたのである。

黒猫のオスでヤンチャ、先月亡くした飼い猫のドラマとは正反対。ゲージに入れると出してくれと大啼きする。外に出してやると、部屋の中を駆け回る。そして、突進するようにじゃれてくる。

後日、動物病院を再受診、猫エイズや白血病、寄生虫等の検査は陰性。病気ならば自分で飼うしかないかと覚悟していたが、里親を募集することにした。

ドラマが亡くなる時、寄り添った。悲鳴を上げて前足が痙攣、瞳から光が消える瞬間まで、身体を撫でていた。失くした生命のズシリとした重さを実感、いや、痛感した。思い返せば、両親は病院で亡くなった。埼玉のアパートで孤独死した次兄は、警察の霊安室で対面。干物のような変形した顔はレプリカのようで、未だにその死を実感、いや納得できていない。

子猫の生命を背負うことに臆したのだと思う。かわいい盛りの子猫の里親はほどなく見つかって、しょんぼりしている自分がいる。床に光るものを見つけて摘まんだら、指先に刺さった。ドラマの爪だった。しっかりなさいと叱咤されたような気がした。

# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

## ー 硬式テニス参加者募集 ー

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内＆屋外コート
・火曜日（9:30 ～ 12:00）
・水曜日（9:30 ～ 12:00）
・土曜日（10:00 ～ 12:00）
連絡先：中川 (☎070-8991-1682)

## 備後上下ふる里翁館

昭和を感じるレトログッズ約 1 万点を集めた資料館。蓄音機やレコード、壁掛け時計、映画のポスター、アイドルグッズ、伊万里焼等の骨董品……、懐かしいアンティーク商品がいっぱい、買うこともできます！切手博物館も併設。

■開館日：毎週土曜・日曜・祝日
■入館料：500 円（中学生以下無料）
■住所：府中市上下町 2038-1(090-7776-8992 代表・藤井）

## 《情報＆原稿を募集します!!》

●仲間募集　●教室＆講座案内
●イベント情報　●あなたの大切な本の紹介
●ボランティア・ライター (現地記者) 募集！
※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

http://shobara.wix.com/dorakuroa

## 徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家（徳岡佛性坊）として多彩な活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品の展示販売を、どら書房の一角でしています。
茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を展示しています。あなたのお気に入りの逸品が見つかるかもしれません。
※天井が低いので頭上注意！

## どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売（値札のないものは百円均一）。
毎週水曜日の朝に入荷予定。

●黒ニンニク好評販売中！●
（青森産ニンニクホワイト六片使用）
甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの効果が期待できます。
（80ｇ入り 500円）
※売り切れのときはご容赦ください。

## 編集後記

◇「岡田美知代覚書③」、ビッグネームが続々と登場、牧水のミカンの皮の盃はやってみたいと思いました。
◇先月号で猫の話は終わるつもりが、近所の駐車場で子猫を保護。大きな啼き声で自分の命を救ったのだと思います。里親の方がフェイスブックで動画を上げてくれるので安心、幸せに暮らしているようです。
◇反対意見も多い中で強行されたオリンピック、日本の選手の活躍には心が癒されます。選手の感謝の気持ちがパフォーマンスに現れています。
◇八月や六日九日十五日、同類句の投稿が多くなる季節です。酷暑の夏、ご自愛ください。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第 242 回

しょうばらくんちいち

# 「庄原九日市」

令和３年 ８月９日（月）　9:00～13:00

## 庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

## TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
　８月８日～10日　１０時～１６時
　　世界児童画ライブラリー作品展

★どら書房　→休憩所あります！！
　月曜日と火曜日はお休み
　但し、九日市の日は営業します。

★楽笑座で「まかない食堂」開催！！
　１０：３０～１２：００　そば　６００円　20 食限定

★楽笑座で「うた声喫茶」
　１３：３０～１５：００　参加料５００円

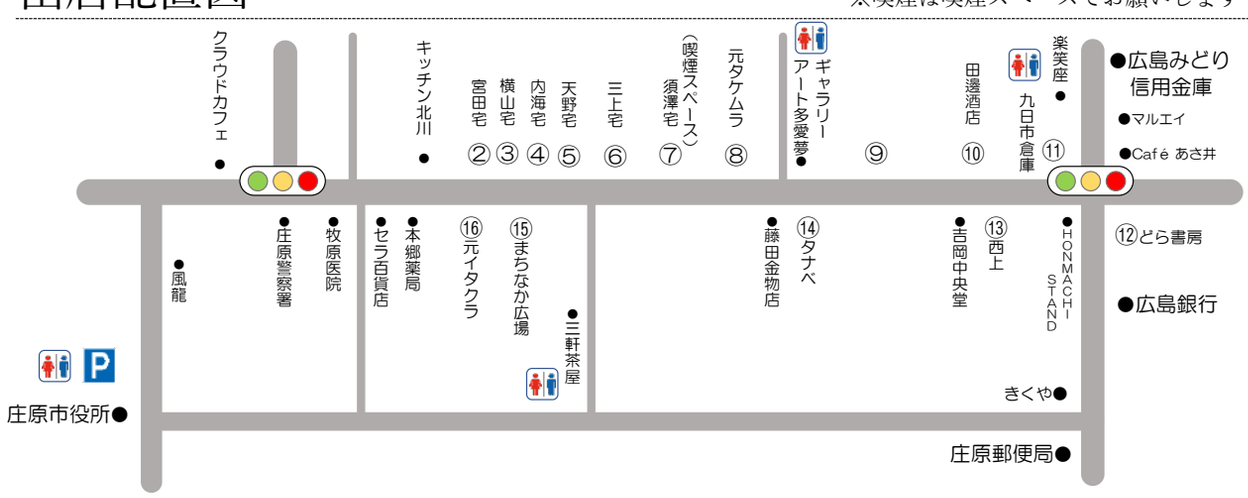
★きくや　→総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍　→九日市スペシャルで餃子２００円！

★カフェ・クラウド→タピオカドリンク１００円引き
　　九日市特製ピタサンド６００円

## 出店配置図

※喫煙は喫煙スペースでお願いします




②お休み

③文屋

④お福
　郷屋

⑤工房アム
　ぬくもり
　ちくちくはうす玉手箱
　８３２ｇの奇跡
　かぐや姫

⑥和み屋
　クラフトショップ

⑦農楽会

⑧とらぢ
　二ハそば加工所
　アーミッシュ
　さだっさ
　健康企画
　ふくふく牧場

⑩克國水産

⑫どら書房

⑬久代水産
　くんえん工房　香豚

⑭まなべ商事

⑮宮川屋
　佐藤園芸
　田崎屋

⑯片衛商店

出店申込みは、【毎月 20 日締切】コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～　九日市愛好会事務局
〒727－0013　庄原市西本町 2－1－10 楽勝座内　TEL/FAX　0824-72-8285

ホームページ
http:www.kunchi-ichi.jp